Tsukuba Psychological Research
2000, **22**, 183-190

自己愛傾向からみた友人関係における“山アラシ・ジレンマ”への「心理的対処反応」の特徴

筑波大学大学院(博)心理学研究科　長沼　恭子

茨城県立医療大学　落合　幸子

筑波大学心理学系　落合　良行

Psychological coping reactions to the porcupine dilemma from the viewpoint of narcissistic tendency

Kyoko Naganuma (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*),
Yukiko Ochiai (*Center for Arts and Humanities, Ibaraki Prefectural University of Health Sciences, Ami 300-0394, Japan*) and
Yoshiyuki Ochiai (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

This study examines from the viewpoint of narcissism tendency the characteristics of psychological coping reactions to the porcupine dilemma, the conflict over psychological distances between 'important' friends in adolescence. There are 3 forms of psychological coping reactions to the porcupine dilemma; namely, cowering, clinging, and giving-up. Using the Narcissitic Personality Inventory (NPI) developed by Raskin and Hall (1979), factors contributing to narcissism tendency were examined and discussed in terms of the 3 orms of psychological coping reactions. Factor analysis of the NPI data identified the 4 factors of "sense of authority and superiority," "desire for attention and praise," "self-indulgence and self-praise," and "self-assertion and self-reliance." The results revealed that not all these factors were related to the psychological coping reactions. The factor most strongly related was the "desire for attention and praise," a tendency which was strongly observed in the psychological coping reaction of clinging.

Key words: porcupine dilemma, psychological coping reactions, desire for attention and praise, friendship.

問　題

青年期の友人関係において生じる葛藤として，「山アラシ・ジレンマ」がある．これは，相手との適度な心理的距離を模索する際に生じる葛藤である．具体的には，「相手と近づきたいけれど，近づきすぎたくはない(離れたいけれど，離れすぎたくはない)」というジレンマである．長沼(1999)では「山アラシ・ジレンマ」を，相手と近づこうとする場合に生じるジレンマと，相手と離れようとする場合に生じるジレンマに分けて検討した．その結果，相手と近づく場合に生じるジレンマには，「自分が傷つくことの回避」と「相手を傷つけることの回避」という2つの心理的要因が働いていることが明らかとなった．また，相手と離れる場合に生じるジレンマには，「自分が寂しい思いをすることの回

避」と「相手に寂しい思いをさせることの回避」という2つの心理的要因が働いていることが明らかとなった．これらは共通して，自分が傷ついたり寂しい思いをすることを回避しようとする対自的要因と，相手を傷つけたり寂しい思いをさせることを回避しようとする対他的要因に整理された(Fig. 1)．そして調査の結果，この「山アラシ・ジレンマ」は，大部分の青年が感じている一般的傾向であることが分かった．

加えて，生じた「山アラシ・ジレンマ」に対して，どのような「心理的対処反応」をとるか，青年へインタヴューを行なった．それをもとに作成された質問紙によって探索してみた結果，「萎縮(相手の対応に対して動揺したり，自分を出すことに戸惑ってすくむ)」，「しがみつき(つながりを確認しようとしたり，相手を束縛しようとする)」，「見切り(相手との隔たりを拡大させ，関係を断ち切ろうとする)」という3つが抽出された(Table 1)．これらはすべて自分中心の対処反応であり，関係構築の意味では受動的かつ消極的である点が特徴的であった．

そして，「山アラシ・ジレンマ」とそれに対する「心理的対処反応」の関係を検討してみたところ，対自的要因によって生じている「山アラシ・ジレンマ」ほど，「心理的対処反応」に結びつきやすいことが明らかとなった．ジレンマ自体は，相手を傷つけたり寂しい思いをさせないようにと対他的要因が働いて生じるものもある．しかし，いざジレンマに対して「心理的対処反応」をしめす段階では，自分が傷ついたり寂しい思いをすることを回避しようとするジレンマが強く影響していたのである．「山アラシ・ジレンマ」は，ごく一部の青年に当てはまるものではなく，程度の差こそあれ大多数の青年が感じている葛藤であった．問題は，生じた「山アラシ・ジレンマ」に対して「萎縮」「しがみつき」「見切り」といった受身的な「心理的対処反応」をとることで，親密な関係の構築に支障をきたすのではないかと考えられた．

ただし，「山アラシ・ジレンマ」が生じている青年すべてが，一様に「心理的対処反応」をしめしているわけではなかった．それぞれの「心理的対処反応」ごとに結びつきやすい「山アラシ・ジレンマ」は異なっており，たとえ「山アラシ・ジレンマ」が生じていても，「心理的対処反応」には結びつかない青年もいた．これらの研究結果から，「山アラシ・ジレンマ」と「心理的対処反応」の間には，何らかの潜在変数が介在していると考えられた．しかし，そのすべての潜在変数を明らかにするためには，まず「山アラシ・ジレンマ」と「心理的対処反応」の特徴を明らかにする必要があると考えられた．「萎縮」「しがみつき」「見切り」という3つの「心理的対処反応」には，自分が傷つきたくない，寂しい思いをしたくないという対自的要因による「山アラシ・ジレンマ」が強く影響していた．このことから，自分中心であるという点で“自己愛傾向”が関与していることが予測され，「心理的対処反応」の特徴を探る変数として有効ではないかと考えられた．

自己愛(ナルシシズム)は，Freud, S.(1914)をはじめとする古典的精神分析学においては，主として病理的レベルで捉えられてきた．しかしFedern, P.(1977)が健康な自己愛と病的な自己愛を区別して以降，Kohut, H.(1971)やJacobson, E.(1964)によって体系的に自己愛の発達論が検討されてきた．これらの自己愛論のなかでは，健康な自己愛の満足が人間の精神生活には基本的に必要であること，対象愛へ変化してしまうのではなく自己愛そのものも発達していくことが示されている．そして，自己愛を健康な人格特性と捉えたRaskin & Hall(1979)によって，自己愛人格目録(Narcissistic Personality Inventory; NPI)が開発された．Raskin & Hall(1979)はDSM-Ⅲ(APA, 1980)の自己愛人格障害の記述からNPIを作成したが，これにより測定的研究が活発になされるようになってきた．日本でも翻訳され多くの実証的研究がなされてはいるが，その構造は特定

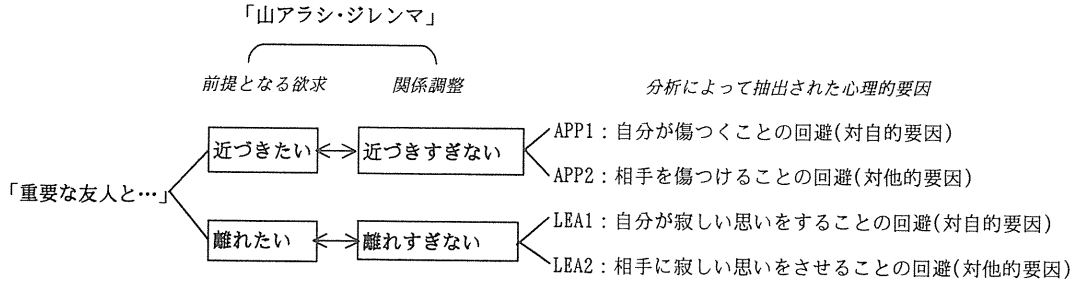


Fig. 1　「山アラシ・ジレンマ」の心理的要因

Table 1　心理的対処反応の因子パターン(Promax 回転後)

項　　目	F1	F2	F3
F1　萎縮(α＝.89)			
RC31 相手が不機嫌になると，自分のせいではないかと思い悩んでしまう	**69**	03	−06
RC23 相手に嫌われるのではないかと思うと，何もできなくなってしまう	**67**	07	08
RC58 相手の気分が沈んでいると，自分が傷つけたのではないかと気になる	**65**	06	−13
RC47 相手の顔色をうかがってしまう	**63**	05	12
RC43 相手に冷たくされると，何か自分が悪いことをしたのではないかと気になる	**62**	11	−16
RC27 相手はこう考えるのではないかと，あれこれ思い悩んでしまう	**60**	14	−04
RC03 相手が何を考えているのかが気になって動けなくなる	**58**	12	−02
RC51 自分の内面をどこまで出していいのか迷ってしまう	**55**	−05	29
RC15 ありのままの自分を出していいものかと迷ってしまう	**53**	−04	29
RC11 どこまで相手に踏み込んでいいのか迷ってしまう	**53**	−01	07
RC19 相手が怒りだすと，びくびくしてしまう	**49**	06	07
RC39 相手が自分にそっけない態度をとると，動揺してしまう	**48**	24	−20
RA33 相手の感情に影響されやすい	**46**	14	−10
RC55 自分が相手をどう思っているかより，相手が自分をどう思っているのかを考えてしまう	**37**	30	12
RA37 自分の考えと相手の考えの区別がつかなくなる	22	18	12
F2　しがみつき(α＝.81)			
RA49 自分がどれだけ相手から必要とされているか，確かめたくなる	00	**75**	14
RA53 どちらがどれだけ相手のことを思っているのか，確かめたくなる	−02	**68**	19
RA21 自分のことを大切にしてくれているか，相手の気持ちを試したくなる	−02	**67**	17
RA05 自分だけを見ていてくれないと嫌だ	11	**55**	02
RA45 相手が自分に見せない部分があるのは不安だ	09	**55**	−08
RA57 相手から必要とされなければならないと考えてしまう	18	**48**	−04
RA09 相手の行動が気になってしまう	32	**42**	−04
RA41 相手に自分の価値観を押しつけてしまう	−06	**41**	16
RA25 相手が自分から離れていこうとすると，追いかけてしまう	19	**36**	−29
RB02 相手が自分について来ても来なくても気にならない	−14	**−35**	23
F3　見切り(α＝.80)			
RB30 相手の問題には関わりたくない	−02	−07	**63**
RB22 自分の気持ちを相手に知られたくない	21	−10	**59**
RB38 相手がどうあろうと自分とは関係ないと思う	−18	−06	**52**
RB42 自分から相手に近寄っていくことはしたくない	09	−11	**49**
RB06 友人には深入りしたくない	10	−27	**48**
RB54 相手の立場に立って考えようとは思わない	−12	07	**47**
RB50 相手が悩み事を話し始めると，話をそらしたくなる	−08	15	**46**
RB18 自分を相手に合わせるのは，損をした気がする	−09	17	**42**
RB46 相手に甘えるということができない	29	−23	**42**
RB26 一度関係が崩れてしまったら，もう元に戻る気がしない	09	09	**40**
RB14 一度でも気持ちが離れてしまったら，つきあうのをやめようとする	−03	16	**40**
RB34 相手に自分の気持ちを乱されたくない	03	−02	**39**
RA60 相手に振り回されているように感じる	21	13	**39**
RB10 相手との関係がうまくいかなくなったら，つきあわないようにする	−07	11	**36**
RC07 どこまで相手を信じていいのかと不安になる	38	11	**35**
RC35 相手の行動の裏側を考えてしまう	21	19	31
RA13 相手の問題にのみ込まれてしまう	16	11	−15
RA17 相手のことを放っておけない	14	28	−27
RA29 相手が落ち込んでいると自分まで滅入ってしまう	33	06	−30
RA01 相手を傷つけるくらいなら，自分が傷ついた方がいいと考えてしまう	33	−14	−31
因子間相関 F1	F1	F2	
F2	50		
F3	21	01	

注1：小数点省略.
注2：α係数は，.35以上の負荷量を示した項目のみを採用して算出した.
注3：項目番号の先頭にあるアルファベットは，項目作成時に便宜的につけられたカテゴリである.

されておらず，研究者により見解が異なるというのが現状である(大石ら，1987；佐方，1987；小塩，1998)．

そこで本研究では，NPIによって測定される自己愛傾向の諸要素から，「萎縮」「しがみつき」「見切り」という「山アラシ・ジレンマ」に対する3つの「心理的対処反応」について，その特徴を明らかにすることを目的とする．

(1)NPIは日本でも数多くの実証的研究がなされてきており，信頼性や妥当性は確認されてきた．しかし，因子パターンは確定されておらず，研究者や調査対象者によってその都度項目を選定し，因子分析を行なっているのが現状である．そこで本研究でも，今回の調査対象者と本研究の目的に最も適切な因子パターンを探り，自己愛傾向の要素を明らかにする．

(2)「山アラシ・ジレンマ」に対する「心理的対処反応」と自己愛傾向の要素との関係を検討する．

(3)自己愛傾向の全要素のうち，(2)でとくに関係の強かった要素から，3つの「心理的対処反応」の特徴を明らかにする．

方　法

＜1＞質問項目

①友人関係における「山アラシ・ジレンマ」を問う36項目：まず，近づく場合のジレンマには「自分と相手が近づきあって，親しい関係でいたいと思いますか」，離れる場合のジレンマには「相手と少し距離をとって，離れたいと思うことがありますか」という条件項目を設定した．「はい」から「いいえ」までの5件法で接近欲求の有無について回答をもとめた．

条件項目に相反する項目として作成された，近づきすぎたくないという心理状態を尋ねる22項目，離れすぎたくないという心理状態を尋ねる20項目，計42項目からなる「山アラシ・ジレンマ」項目．それぞれの項目について，「非常によく感じる」から「まったく感じない」までの5件法で，感じる程度を尋ねた．

②「山アラシ・ジレンマ」に対する自己内での「心理的対処反応」を問う45項目：はじめに「同性の友達とのつきあい方について，難しさを覚えることもあると思います．そのようなとき，以下の項目にそれぞれ書いてあるようなことは，あなたにどのくらい当てはまりますか．」という教示を与えた．「はい」から「いいえ」までの5件法で回答をもとめた．

③NPI日本語版(Raskin & Hall, 1979；大石ら，1987)の全54項目：「とてもよく当てはまる」から「全く当てはまらない」までの5件法で測定された．Raskin & Hall(1979)によって作成されたNPIは，二者択一の強制選択法式で回答する方式が取られている．大石らによるNPIも同様の方式がとられているが，宮下・上地(1985)は7件法で，佐方(1986)，小塩(1999)は5件法に回答方式を修正するなど，さまざまなかたちで用いられてきている．本研究では，あくまでも一般青年の中にみられる人格特性としての自己愛傾向を扱うため，二者択一方式ではなく，5件法で自己評定させた．

＜2＞調査対象者　茨城県および千葉県内の国立大学生217名(平均年齢＝19.65歳)．内訳は，男性96名，女性121名．

＜3＞調査時期　1998年11月．

結　果

1．自己愛傾向の要素の分析

NPI54項目への回答を対象に，因子分析を行ない初期解をもとめた．共通性の低かった7項目を削除し，47項目について再度因子分析を行なった(共通性＝1，Promax回転)．固有値の推移と解釈のしやすさをもとにして因子数を決定した．4因子が妥当であると考えられた(Table 2)．47項目による全分散のうち回転前の4因子によって説明できる割合は，41.40%であった．

第1因子は，「N50　私は生まれつき，リーダーとしての素質をもっている(.84)」，「N46　周りの人々はたいてい私の権威を認めてくれる(.76)」などの項目が高い負荷量を示した．この因子は，周囲への権威意識や優越感をもっている自己愛傾向を表していると思われ，「NⅠ　権威・優越感」因子とした．

第2因子は，「N36　私は人から誉められることを望んでいる(.73)」，「N44　私には注目の的になってみたいという気持ちがある(.71)」などの項目が高い負荷量を示した．この因子は，周囲から特別な扱いをされたいという受身的な自己愛傾向を表すと考えられ，「NⅡ　注目・賞賛欲求」因子とした．

第3因子には，「N21　私には自分の体を人に自慢したいという気持ちがある(.67)」，「N26　私は周りの人たちより，ずば抜けたものを持っていると思う(.57)」などの項目が高い負荷量を示した．この因子は，自分の体型や特性について耽溺している自己愛傾向と考えられたため，「NⅢ　自己耽溺・自

Table 2　NPI47項目の因子パターン（4因子解・Promax 回転後）

項　　目	f1	f2	f3	f4
F1　権威・優越感				
N50 私は生まれつき，リーダーとしての素質をもっている	**84**	22	−11	−06
N47 私はもともとリーダーになるのが性格に合っている	**76**	21	−12	02
N46 周りの人々はたいてい私の権威を認めてくれる	**76**	07	07	−11
N15 私は良いリーダーになれる自信がある	**71**	08	01	12
N49 私が言えば，どんなことでもみんな信用してくれる	**69**	08	13	−17
N09 私に接する人はみんな，私という人間を自然に気に入ってくれるようだ	**64**	−12	−04	−07
N33 いつも私は話しているうちに，話の中心になってしまう	**60**	04	−02	11
N32 人は誰でも私の話を喜んで聞きたがる	**60**	−03	06	−03
N22 私には，人の気持ちをずばりと読み取る力があると思う	**58**	01	02	−19
N02 私は周りの人に影響を与えることができるような才能を持っている	**56**	−12	20	21
N43 自分自身では要領もいいし賢明さも備えていると，私は思っている	**53**	−17	22	18
N18 私は周りの人が学ぶだけの値打ちのある長所をいくつかもっている	**53**	−13	27	08
N19 自分の思いとおりに人を使うのは，それほど難しいことだと思わない	**51**	01	−05	−02
N01 感受性のするどさという点では，私は人に負けないものをもっている	**42**	−01	11	−05
F2　注目・賞賛欲求				
N36 私は人からほめられることを望んでいる	−13	**73**	04	−03
N38 私は支配欲が強いほうだと思う	08	**62**	01	−02
N44 私には注目の的になってみたいという気持ちがある	06	**61**	04	23
N40 私はうらやましがり屋だと思う	−33	**59**	−03	−01
N12 どちらかといえば，私は注目される人間になりたい	11	**58**	08	23
N06 私は強い人間だと思われたい	−02	**55**	−05	12
N48 私はえらい人だといわれる人間になりたい	01	**50**	32	11
N28 ここというときには，私は人目につくことを進んでやってみたい	08	**48**	11	28
N39 私は人より先に流行を取り入れるのが好きだ	11	**48**	−08	07
N35 欲しいものは全部どうあっても手に入れないと気が済まない	−18	**46**	28	30
N34 人が私にいろいろとしてくれるのを期待している	22	**40**	−08	−23
N25 世間の目から見て，かなりの生活ができなくては満足できない	02	**40**	32	−11
N17 私は人々を従わせられるような権威を持ちたいと思う	22	**38**	30	−18
F3　自己耽溺・自己賞賛				
N21 私には自分の体を人に自慢したいという気持ちがある	−11	14	**67**	−14
N26 私は自分の体を見るのが好きだ	−06	06	**65**	−05
N54 私は周りの人たちより，ずば抜けたものをもっていると思う	38	−10	**57**	10
N27 私は美しいものを決して見逃さない優れた感性の持ち主だ	08	−06	**53**	24
N53 自分は他人より有能な人間であると思う	42	−02	**51**	14
N14 私は才能に恵まれた人間であると思う	40	−11	**42**	25
N42 私は鏡を見るのが好きだ	28	08	**39**	01
N51 将来，誰かに私の伝記を書いてもらいたいものだ	06	14	**39**	−06
N08 もし，この私が世界を自由にすることができるのなら，もう少しましな世の中にできると思う	20	−11	**34**	−01
F4　自己主張性・自己信頼				
N05 どんなことでも，あえて挑戦するというようなやり方が，私の性格に合っている	−09	06	−11	**64**
N45 これまで私は自分の思い通りのやり方でやってきたし，今後もそうしたいと思う	14	−13	03	**63**
N13 私は必ず成功してみせる	−04	08	25	**62**
N37 自分自身の気持ちに忠実に生きるということが，まず重要である	−20	09	01	**57**
N16 私は自分の意見をはっきり言うほうだ	34	05	−30	**51**
N23 自分にその能力があるとはっきりしていることなら，責任を持って決断しても良いと思う	−07	04	04	**46**
N11 ゲームをするからには，負けるのはどうしても嫌だ	−32	12	28	**45**
N10 私はどんなことでも，あまり気がねなどしないで自分の好きなように振る舞っている	24	−07	−18	**44**
N31 私の健康は心身ともに最高だ	05	−06	01	**39**
N03 どうやら私は，控えめな人間ということには程遠い人間だと思う	32	27	−32	**39**
N20 周りの人が私の期待しているだけの敬意を払ってくれないと，気持ちが落ち着かない	23	32	34	**−35**

因子間相関	f1	f2	f3
f2	25		
f3	35	19	
f4	39	18	21

己賞賛」と命名した.

第4因子には,「N05　どんなことでも,あえて挑戦するというようなやり方が,私の性格に合っている(.64)」,「N45　これまで私は自分の思い通りのやり方でやってきたし,今後もそうしたいと思う(.63)」などの項目が高く負荷していた.この因子は,自分自身の決定に自信を持ち,かつ実際に行動化する自己愛傾向を表していると考えられ,「NⅣ自己主張性・自己信頼」の因子とした.

以上のように,NPIで測定された自己愛傾向は,「NⅠ　権威・優越感」,「NⅡ　注目・賞賛欲求」,「NⅢ　自己耽溺・自己賞賛」,「NⅣ　自己主張性・自己信頼」の4つの要素からなっていた.NⅠ,NⅢ,NⅣが自分から周囲に働き掛ける能動的な自己愛傾向であるのに対して,NⅡは自分の自己愛を満たすよう周囲からの働きかけをもとめる受動的・願望的な自己愛傾向であると考えられた.

2.「心理的対処反応」と自己愛傾向との関係

まず,調査対象者全体のデータをもとにして,「山アラシ・ジレンマ」を問う36項目全体の平均値をもとめたところ,3.246点であった.また,各調査対象者ごとに平均を算出すると,3.0点以上に72.8%の調査対象者が含まれていた.これにより,大部分の青年に「山アラシ・ジレンマ」が生じていることが確かめられた.

そして,「萎縮」「しがみつき」「見切り」の3つの「心理的対処反応」,NPI全体および各下位尺度について,それぞれ平均値を算出した.その数値をもとにしてもとめた相関関係をTable 3に示す.

NPI全体で「心理的対処反応」との関係を見てみると,「しがみつき」にのみ相関がみられた.そして,下位尺度ごとに「心理的対処反応」との関係を見てみると,「NⅡ　注目・賞賛欲求」で,「萎縮」とも「しがみつき」とも有意な相関が得られた.「NⅠ　権威・優越感」でも「しがみつき」との相関がみられたものの,相関係数は低かった.「NⅢ自己耽溺・自己賞賛」および「NⅣ　自己主張性・自己信頼」とは有意な相関が得られなかった.自分の特性に耽溺したり,自分自身の決定に自信をもち,かつ実際に行動化する自己愛傾向は,「心理的対処反応」とはあまり関係がないことが分かった.「心理的対処反応」ともっとも関係があった「NⅡ注目・賞賛欲求」は,自己愛傾向の中でも唯一受動的・願望的な特性であった.

つまり,「山アラシ・ジレンマ」に対する「心理的対処反応」に関係しているのは,自己愛傾向の全体的要素ではないと考えられる.優越感や自己耽溺,自己主張性といった自分から周囲に働き掛けていくような自己愛傾向は,ジレンマに対する「心理的対処反応」にほとんど関係していなかった.反対に,周囲からの注目や称賛を受けたいと願う受動的な自己愛傾向が関係していることが明らかとなった.

3.注目・賞賛欲求と「心理的対処反応」との関連

そこで,自己愛傾向を全体としてひとまとめにするのではなく,もっとも関係があった注目・賞賛欲求という一つの特性に焦点を絞り,3つの「心理的対処反応」との関連をみていくことにした.

調査対象者全体に対して,「萎縮」「しがみつき」「見切り」という3つの「心理的対処反応」の平均値をそれぞれもとめた.そして注目・賞賛欲求の高低によって2群に分け,「心理的対処反応」(3)と注目・賞賛欲求(2)の2要因混合計画による分散分析を行なった(Fig. 2).その結果,交互作用が有意であったため($F(2,412)=6.16$, $p<.01$),LSD法による多重比較を行なった.

「心理的対処反応」の単純主効果は,すべての群

Table 3　3つの「心理的対処反応」と自己愛傾向の相関関係

	萎　縮	しがみつき	見切り	M	SD
NPI-TOTAL	.014	.278***	.023	2.95	0.56
N1　権威・優越感	−.045	.205***	.008	2.72	0.77
N2　注目・賞賛欲求	.211***	.353***	.064	3.14	0.70
N3　自己耽溺・自己賞賛	−.010	.147+	.013	2.44	0.80
N4　自己主張性・自己信頼	−.129+	.113	−.024	3.41	0.64

***$p<.001$, +$P<.10$

において有意であった(MSe＝.308)．注目・賞賛欲求の高い群では，「見切り」にくらべて有意に「萎縮」や「しがみつき」という「心理的対処反応」を多く示していた．また，注目・賞賛欲求の低い群では，「萎縮」>「しがみつき」>「見切り」の順に得点が高くなっていた．

一方，注目・賞賛欲求の単純主効果は，「しがみつき」において有意であった．($F(1,206)=18.79$, $p<.01$)．注目・賞賛欲求の高い群は低い群にくらべて，「しがみつき」の得点が有意に高くなっていた．また「萎縮」でも，有意傾向がみられた($F(1,206)=3.10$, $p<.10$)．ここでも注目・賞賛欲求が高い群は低い群にくらべて，「萎縮」しやすくなっていた．「見切り」では有意な差は得られなかった．

注目・賞賛欲求という受身的なかたちで自己愛の充足を得ようとする人ほど，とくに「しがみつき」という「心理的対処反応」を示しやすいことが明らかとなった．「しがみつき」は，相手とのつながりを確かめようとして相手を束縛するという「心理的対処反応」である．これは，「萎縮」や「見切り」にくらべて非常に支配的な側面をもつものである．自分の中に生じた「山アラシ・ジレンマ」を解消するために，絶えず相手の中に自分の存在を見出し，注目・賞賛をもとめて相手をコントロールしようとする姿がうかがえる．

このような相手にしがみつくかたちでの「心理的対処反応」について小此木(1978)は，「お互いの棘を否認して生きる－否認・合体的な生き方」として指摘し，「山アラシ・ジレンマ」に疲れ，自我分裂意識に耐えられぬ人のとる自己防衛策の一つであるとしている．自分の棘も相手の棘も否認し，相手をコントロールすることで安定しようとする「心理的対処反応」であるといえよう．このような「しがみつき」という「心理的対処反応」は，相手が自分にとって依存対象である場合や，支配関係にある場合に生じやすいと考えられる．

以上のように，NPIによって測定された自己愛傾向は，「権威・優越感」，「注目・賞賛欲求」，「自己耽溺・自己賞賛」，「自己主張性・自己信頼」の４つの要素から成り立っていた．しかし，「心理的対処反応」には自己愛傾向全体が関連しているのではなく，注目・賞賛欲求という受身的・願望的な自己愛

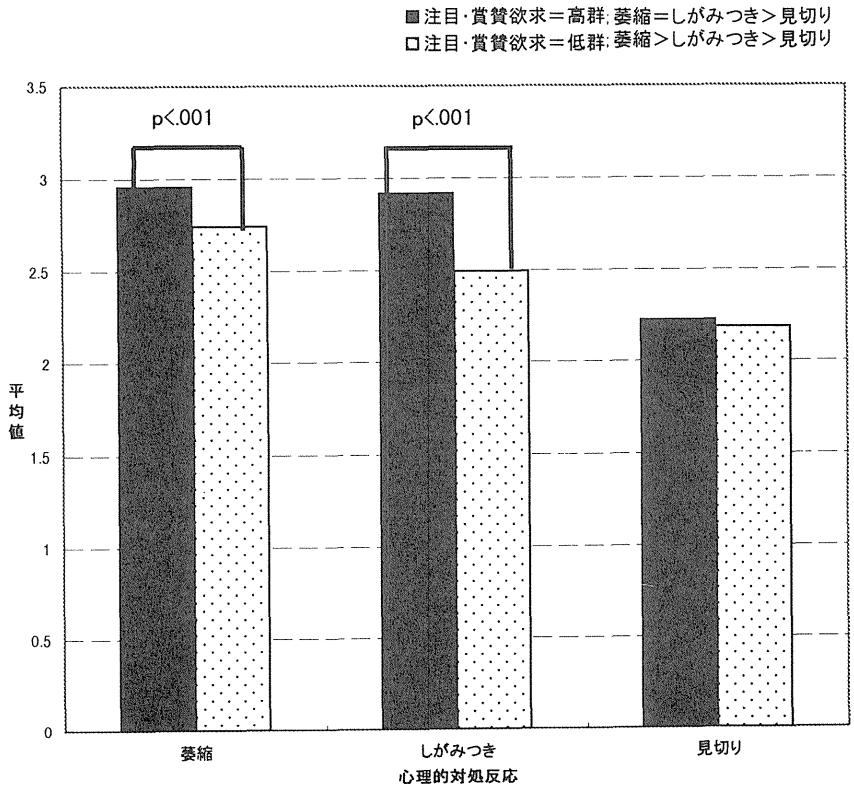


Fig. 2　注目・賞賛欲求による「心理的対処反応」の差異

の要素がとくに関連していることが明らかとなった．なかでも，相手を束縛し相手の中に自分の存在を絶えず確認しようとする「しがみつき」という「心理的対処反応」に，自己愛の受身的な充足を得ようとする要素が特に関連していることが明らかとなった．

引用文献

Federn, P. 1977 *Ego psychology and the psychoses.* London: Edoardo Weiss.

Freud, S. 1914 *Zur Einfurung Narzibmus* 懸田克躬・高橋義孝他(訳) 1969 ナルシシズム入門，フロイト著作集5，人文書院.

Jacobson, E. 1964 *The self and the object world* 伊藤(訳) 1981 自己と対象世界，岩崎学術出版社.

Kohut, H. 1971 *The Analysis of the Self.* New York: International Universities Press.

長沼恭子 1999 青年期の友人関係における「山アラシ・ジレンマ」の分析 筑波大学大学院心理学研究科中間論文(未公刊).

大石史博・福田美由紀・篠置昭男 1987 自己愛的人格の基礎的研究(1)－自己愛的人格目録の信頼性と妥当性について－ 日本教育心理学会第29回総会発表論文集，534-535.

小塩真司 1998 青年の自己愛傾向と自尊感情，友人関係のあり方との関連 教育心理学研究，**46**，280-290.

Raskin, R. & Hall, C.S. 1979 A Narcissistic personality Inventory. *Psychological Reports,* **45**, 590.

佐方哲彦 1987 自己愛人格目録(NPI)の妥当性に関する研究－Y-G検査およびMPI，MMPIとの相関から－ 日本教育心理学会第29回総会発表論文集，538-539.

－1999．9．30 受稿－